

アート日和@北浦和 ダンス、きたうらワン、土器づくりワークショップ…

2014年9月20日 北浦和西口銀座商店街

9月20日(土)に北浦和西口銀座商店街で(アート日和@北浦和)が開催されました。この催しはSMFと商店街が連携して開催した複合プログラムで、商店街の恒例企画「ちびっ子広場」にあわせて、商店街のまんなか(遊牧民の移動式仮設住居)を設置し、土器づくりやダンスのワークショップ、詩の朗読会、テラコッタの作品展示、そしてきたうらワンのFamilyを探すコンテストなど、多彩なアートプログラムが展開されました。

お昼を過ぎたころからゲルのそばで、「社会芸術/ユニットウルス」による土器づくりや、詩人で画家の関口将夫さんによる子ども向けの詩の朗読がはじまりました。関口さんが子どもたちと一緒に即興で詩を詠んだり、作った土器を縄文式火鉢で乾かしたりしながら、それぞれがゲルのまわりで縄文の生活に思いをはせると、大きな口上とともに「うちの家族ものまねダンスショー！」がはじまりました。



そのそばでは、8月に埼玉県立近代美術館で実施したワークショップで作られたテラコッタ作品が、小さな街のように展示されています。3時ごろになるとワークショップの参加者がやってきて「展示ツアー」が始まりました。子どもたちが実際にどんな気持ちでテラコッタの小屋をつくったのか、うなづくと話してくれました。「こんなおうちに住みたいの」とか「屋根が顔になっているよ」といった具合に、ながめているだけではわからないおもしろエピソードがいっぱいでした。

当日、とても静かに、そしてもっとも熱い盛り上がりを見せたのは、「きたうらワンFamilyを探せ！」に応募していただいたデザイン画の展示でした。54点の応募作品を野外に展示し、道行く人びとに人気投票用紙を渡すと、ひとつひとつ作品を見ていねいにコメントを書いたり、自作を見つけて得意げに語り合ったりするようすがあちこちで見られました。投票数は最終的に200を超え、上位20点の入選作品が選ばれて、川口信用金庫のご厚意により、しばらくの間ATMコーナーに展示されるうれしいハプニングも起こりました。



うちの家族のものまねダンスショー!

「うちの家族のものまねダンスで、何でもかんでも笑いにしちゃおう!」とたくらむワークショップが、9月20日に北浦和西口銀座商店街で開催されました。

「愛すべきバカ」を創作モットーにかかっている舞踊家・カワムラアツノリさんを講師にむかえ、子供5名、大人2名の参加者が、家族愛いっぱいの「うちの家族の観察結果」を披露し、ダンスにおきかえて発表しました。参加した子供たちからは、「あ〜、楽しかった!」という声が上がリ、大人の参加者は「家族の不協和音を笑いに変えるヒント」をもらったようでした。

藤井香(SMF運営委員)

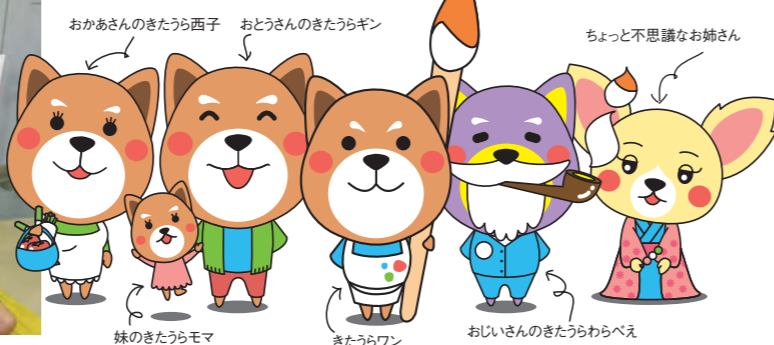


グも起こりました。

この他にも、自作の土器でお茶をいただく「縄文茶会」やゲルの中で語りあう「世界小屋会議」など、とても盛りだくさんな一日でした。(アート日和@北浦和)は、SMFと商店街の「絆」を再確認するとともに、将来へつなげるアートの種がいくつも芽ばえるすてきな一日になったことと確信しています。

余談ですが、その後のきたうらワンについて一言。後日、20点の中からさらに選ばれた3点をもとにデザイナーの中澤宏美さんにReデザインを依頼し、完成したFamilyを10月29日の商店街イベント「ハロウィンジャック2014」にあわせてお披露目することができました。当日は入選した20名を川口信用金庫に招待し、記念のTシャツを贈呈するなど、ささやかなセレモニーを開催したところ、みなホクホク笑顔でいっぱいになりました。

石上城行(SMF運営委員)



アート日和@行田 行田もいよいよアート日和

2014年11月23日 行田市「牧禎舎」



わ

たしがSMFに参加するようになってから早いものでもう8目になります。このけっして短くはない時間の中で、私はSMFというプラットフォームをつづながら県内外のさまざまなアート関係者と出会い、そのゆるやかなつながりの中に自分を位置付けていくことができました。2013年からは行田の若者たちと地域の文化振興を目的とした市民団体SEEDを立ち上げ、地域のアート化に向けて新たな一歩をふみだしました。今回の(アート日和@行田)は、これまで少しずつみかさねてきたとりくみを、SMFのサポートを受けて一日のイベントにグググッと凝縮したような、たいへん充実したものとなりました。

当日の11月23日は完璧な秋晴れ。すこし肌寒さを感じるようになってきた空気がきもちよいこの日、行田の牧禎舎でアート日和@行田が開催されました。

午前中は石上城行さんによるワークショップ「自分だけの小屋をつくらう」が開かれました。スチレンボードで思いおもしろい小屋をつくるこのワークショップには地元の若者や親子づれなどが参加しました。ワークショップの終わりにはそれぞれが自作の小屋についての思いを語り合い、多様な意見にたびたび笑いが起こっていました。

お昼からは「ユニット・ウルス」(吉田富久一さん、吉川信雄さん、大内公公さん、長谷川千賀子さん)のワークショップがはじまりました。朝から建てこみはじめたゲルはみごとに完成し、ウルスのメンバーや地域の子もたたちが出入りしたり、ときおり何か話し合ったりしていました。土器作りのワークショップでは親子づれでの参加が多く、明るい雰囲気できらびました。土器は火鉢で

焼成され、参加した方がたの手土産となりました。

午後からは、カワムラアツノリさんの「うちの家族のものまねダンスショー！」がおこなわれました。地元の若者や小中学生、電動車椅子に乗った女性などさまざまな参加者がありました。ほとんどがダンス未経験者でしたが、家族のものまねというみちかなとっかかりと、小山綾子さんと平澤瑤さんのたくみなリードによって、最後の発表ではとてもたのしくおもしろいダンスショーが披露されました。このとき、足湯をしながらダンスショーを鑑賞している人もいました。これは八木隆行さんがつくった持ちこび可能な風呂桶に、加藤アキラさんがつくった太陽光給湯器であたためたお湯を入れたものです。風呂桶も給湯器もそれぞれ迫力があり、それ自体がアート作品のようでした。つづいて、関口将夫さんと須田千香良さんによる詩の朗読とチェロのセッションが披露されました。落ち着いた迫力のある朗読と、柔軟でいて品のあるチェロの音が会場内にやさしくひびきました。

そして最後は、アーティストも観客もみんなゲルに入って、世界小屋会議が開催されました。飲み物や食べ物をつまみながら縄文土器の話からグローバル社会の話まで、ざっくばらんな話題がゲルをみたましました。たくさんの参加者と個性的なアーティストたちとの共演によって、この日の行田はまさに完璧なアート日和でした。地域の方がたが子どもから大人まで多数参加してくれたことは、今後行田が文化的に深化していくための大きな希望です。これからも個別のジャンルにとらわれない幅広いアートの取り組みをつづけて、行田でのおもしろい(=ゆたかな)暮らしを实践し、提案していきたいです。(参加:計80人) 野本翔平(SMF協力委員)